

島根・トップコーチ

(第78号)平成21年11月6日

【第78号発刊にあたって】

第78号は、島根県自転車競技連盟会長・南場俊一氏にご登場いただきました。

氏は大田高校・出雲工高で自転車競技に関わり、持ち前の情熱と研究心で全国優勝や上位入賞の実績を重ねられました。

氏の素人監督から全国のトップコーチに至る道程を拝読しますと、情熱があらゆる困難を乗り越える源であることを痛感します。

〔プロフィール〕

S40.4 県立高等学校採用

大社、出雲工業、大田高校などに勤務

H15.3 県立高等学校退職

H5～島根県自転車競技連盟 理事長

H21.4～ 同上 会長

〔主な指導実績〕

(全国高校総合体育大会)

S50 自転車競技大会(東京)

道路競走

団体の部 優勝

個人の部 第6位

S57 自転車競技大会(鹿児島市)

道路競走

団体の部 第2位

トラック競技

ポイントレース 第6位

4000㍻団体追い抜き 第6位

学校対抗{総合の部} 第6位

(国民体育大会)

S57 自転車競技(島根・大田市)

道路競走

個人の部 第5位

トラック競技

スプリント 第6位

4000㍻団体追い抜き 第5位

(選抜大会)

S57 自転車競技大会(明石市・淡路島)

道路競走

【発行】 財団法人 島根県体育協会

【担当課】 競技スポーツ課

〒690-0016

島根県松江市上乃木10丁目4番2号

島根県立水泳プール内

TEL 0852(60)5052

<http://www.shimane-sports.or.jp>

団体の部

第2位

個人の部

第3位

第10位

トラック競技

ポイントレース

優勝

4000㍻団体追い抜き 第6位

学校対抗

第5位

(いずれも出雲工業高校在職時)

『ゼロからの挑戦』

～生徒の可能性を信じて～

島根県自転車競技連盟

会長 南場俊一

「わたしは素人・素人の原点」

～どんな運動でもやる～

(1) わたしは今まで寄稿した人のように学生時代に得意なスポーツがあり活躍した者ではない。

わたしは出雲市(旧平田市)坂浦町の生まれ、日本海に面した小さな漁村の育ちである。

小学校時代は市内のバスケットボール、卓球、相撲、水泳、陸上大会など大会直前に強い生徒を集めて参加する学校で育った。中学校は当時160人ぐらい。中学校にはバスケット部と卓球部があった。各大会があるたびに強い者が出るわけだから、ヒーローになるにはどの運動も鍛えておかねばならない。わたしはこれという得意なものはなかったが何でも比較的万遍なく出来たのはこのような背景があったからである。このことが後に教師になってから役立った。わたしが部活動顧問をしたのは軟式野球、卓球、バスケットボール、硬式野球、自転車競技である。どんな顧問でも頼まれれば引き受けたのはこの小中学校での過ごし方が大いに影響している。

(2) 昭和36年4月島根大学入学。

入学後1年間は受験勉強の疲れもあってその体力回復に努めた。2年生になり何か運動をしたいが何がいいかと考えた。別にこれと言った

ものもなく何でもよかったのだが、同じやるならレベルの高いもの、将来日本一を目指すものがいい。

当時、島根のバスケットボールは松江工業高校男子が20年近くにわたり全国のトップクラスにいた(昭和30年代~40年代)。安来高校女子も全国優勝するなど全国にその名を響かせていた。そこで、バスケットボールしかないと決めた。

日本一の松江工業高校の練習を見たり、試合経験したことは大きな財産であった。

「わたしは素人・すべてが学ぶこと」 ~サプライズが起きた~

(1) 大社高校勤務(S44.4~S48.3)

昭和44年4月大社高校に赴任。

昭和30年代大社高校野球部は県下で最も多く甲子園に出場している。その野球部が40年代に入りやや不振が続いた。赴任するや野球部顧問をさせられた。夏に強い大社と言われるのはどんな練習をするのか興味深く注目して見ていた。7月に入り大学生が帰省すると1対1での猛烈なノック。激しい練習に泣く者、グラウンドにいた選手が見えなくなって探すトイレで倒れている者もいた。合宿中食べものが喉を通らない選手もいた。

まさに壮絶な練習であった。これが甲子園への道、伝統校の練習なんだと肌で感じた。残念ながら夏の予選で敗退。

それまで外部の人がしていた監督を8月からわたしがやることになった。このような伝統校の監督をわたしがやっていけるのかとも思ったが最初の赴任地で軟式野球の監督経験があるからやれと説得され前後の見境もなく引き受けた。

秋の選抜大会島根県予選は1回戦勝ったが2回戦で敗退。次年野球の専門の人が来たので監督の座を譲ることになったが、この間の経験は貴重なものであった。

3年目、数人の生徒からバスケット部を作りたいので顧問になってくれと頼まれ引き受ける。

引き受けたものの名門体操部が連覇しているときであり体育館使用に割り込むのは大変であった。大社高校の校区にはバスケットボール部のある中学校は男子は1校、女子はなかった。

しかし部員確保は難しくなかった。中学の時運動部に入部したかったが、入る部のない者や高校で誰もがーからスタート出来からとバスケットボール部に入る者は多く、多いときは60

名を超していた。

このころの練習は走ることに重点をおいた。同僚の教師にこんなに走らせて死なないかと心配させるほどだった。校内マラソンでは1位から6位まで独占するぐらい鍛えた。いま思うのにどうしてこのような激しい練習に生徒がついて来たのか分からない。

バスケットボール部創部2年目の昭和48年1月県新人戦。女子の部で全国制覇したことがある安来高校を倒してベスト4に入ったときはうれしかった。残念なことにこれからというとき3月に異動させられた。教員生活でこのときほど大きなショックを受けたことはない。

(2) 出雲工業高校勤務(S48.4~

S58.3)

失意のどん底で出雲工業高校に異動。何もかもやる気がなくなって、生活が荒れた。

昭和50年3月親しくしていた自転車競技部の顧問が異動、あとを頼むと言われる。教頭からは今年一杯で自転車競技部を廃部にする。半年ほどでいいからやってくれとのこと。わたしも充実した教員生活を送りたいと考えていたころであったから一つ返事で引き受けた。

昭和50年8月全国高校総合体育大会。

この年は東京開催。道路競走は2度と出来るかどうか分からないと言われるほどの大規模な交通規制のもとで行われた。

各県の予選を勝ち抜いた47チームが出場。部員は最後の大会と燃えた。

なんとこの大会で我が出雲工業高校は全国優勝したのである。今まで40位以内に一度も入ったことがないチームが、である。まさに奇跡が起きた。わたしは前夜祭で無名校の監督であるがために隅っこの方にいた。そこに山口県のコーチがやって来て「自転車競技は面白いものですよ、練習をやればやるほど必ず結果は付いてきますよ」と長々と話し出した。どこでも聞く言葉だがこの日は何かが違っていた。聞いているうちに何か起こりそうな気がして直ぐに宿舎に帰り生徒に相当気合いを入れたのを覚えている。それと不思議だったのはその日何回お茶を飲んでも茶柱が立っていた。大きなことが起こりそうな予感がしたので生徒にこのことを話したら笑っていた。

全国優勝で一気に学校側は慌てた。廃部どころではなくなった。私にとっても大変なことが起きた。

「とんでもない素人・目指せ全国制覇」 ～多くの人に支えられて～

今度は学校側から頼むからこのままやってくれと言う。やるなら目指すは全国制覇。それがどんなに大変なことか、わたしは物事の分別がつかない未成年だ。まさに怖いもの知らずである。ここから指導者としての新たな苦悩が始まる。わたしは学生時代のバスケットボールや大社高校での硬式野球、バスケットボールの猛練習で学んだことがある。それが心の支えだ。そして何よりわたしは教師という職業が好きだ。二度と意欲がないような教員生活を送りたくない、強い決意があった。

チーム編成上の方針はチームリーダーとマネージャーの育成。技術的な基本は走らすこと。走力があれば伸びる。力のチームが出来る、力のチームは簡単には負けない。今は全国レベルの駅伝部に当時は対等に近いレースが出来るほどであった。県の駅伝大会に部員を貸し出したこともある。

過酷な練習。自転車競技はグラウンドや体育館で練習する競技と違って部員の練習量が同じである。例えば出雲から赤名までのロード練習。全員が自転車で走る、サボれない。赤名まで行ったが自分だけは出雲に帰らないわけにはいかない。泣きながらも帰って来なくてははいけのである。

また、あるとき、練習終了後グラウンドを見ると部室の前に保護者の車がたくさん来ていた。マネージャーに聞くと部員が動けなくなり保護者が迎えに来たのだとのこと。こんなことがあると、どうしても勝たせたい。保護者との連携に言葉はいらない。結果で示すしかない。

その後、昭和57年度全国高校総合体育大会や選抜大会で優勝や準優勝が出来たことは幸運であった。この年の全国高体連自転車競技部報で「出雲工業高校は全国の勢力分布を塗り替えようとしている」と激賞されたのは無上の喜びであった。

ここに至るまでこの素人監督について来た生徒、理解ある保護者、学校側には感謝、感謝である。

「素人の哲学・強くする秘訣」

わたしは素人である。特に自転車競技においてはそうである。どうしたら生徒が強くなるかは最初のころサッパリ分からなかった。どの生徒が強くなるかが見えないのである。このこと

は弱点であるが考え方一つで長所にもなる。専門家から見れば伸びそうにないと思われる生徒にも大きな期待をかけて指導する。自分も期待されている意識、メンタルな部分を重視する指導である。このことが生徒を大きく伸ばすことがある。素人の長所である。わたし流に言わせて貰えば素人にも素人のやり方で伸ばすことが出来る。

一方大きな成果には大きな準備が必要である。そのためには猛練習しかない。競技力向上へ極限への挑戦である。その際、生徒の体力・体調面には最善の配慮が必要なのは言うまでもない。

つまり素人が強くするには素人の長所を生かした指導方法を見つけること、ただひたすら生徒の可能性を信じて自分を磨くこと、そこに指導者としての生きがいを見つけることである。

高校スポーツはオリンピック選手を育てることを目標にしているわけではない。情熱さえあれば誰にでも成果を上げることは出来ると信じている。

「高校時代は将来への夢のかけ橋だ」

わたしが教師として曲がりなりにもここまでやって来れたのは高校時代の過ごし方にある。

当時はストイックな高校生活であった。クラス全員が勉強ひとすじ、部活動はしない。女子生徒と話すのは男子の沽券にかかわるような風潮があった。しかし将来への夢、目標があるから充実した高校生活でもあった。

生徒に高校における過ごし方がいかに大切か、部活動することの意味や勉強することが人間形成の推進力になると教えることが大切である。わたしは厳しい練習を行ったが途中で部活動を投げ出さないように、また学力向上、進路実現には気を使った。文武両道はわたしにとってなかなか難しい命題であった。

高校時代は貴重な時間である。何かに集中して打ち込める充実した時間を沢山持たすことが重要である。このことがその後の人生に夢と希望を与え豊かにすると思う。

「高校生の成長は計り知れない」

平成5年教育庁総務課から「教育広報」への執筆依頼を受けた。その一部を抜粋する。

今夏の甲子園大会。近年まれに見る好試合を展開した決勝戦に胸動かされたのはわたしだけではあるまい。「何がどうなっているのか、正直わからない。子供たちの底知れない力に驚かさ

れました」優勝した佐賀商業高校の監督はインタビューでこう答えている。驚いたことに、このチームは県大会ノーシード校だったそうだ。

(略)

わたしも全国高校総合体育大会で監督・引率者として自校選手の優勝、準優勝に立ち会ったことがある。その時々これが昨日までのあの生徒かと驚いたものだ。予想をはるかに上回る成長ぶりで素晴らしい感動を与えてくれる生徒。

(略)

わたしは今、大田高校で進路指導部に所属している。今春の卒業生に高校入学時の成績からは考えられもしなかった東大にひたすらな努力で見事合格した生徒がいた。全国大会での優勝や有名大学への合格を美化するものでは決してない。生徒の持つ可能性の大きさを疑うなど言いたいのである。高校生の成長は計り知れないものがある。(略)

生徒の成長を傍らで見つめる教師の存在は大きい。生徒(選手)の夢は教師(指導者)の夢でもある。愛情と信頼を持って接して初めて夢に手が届く。

さらなる感動を求めて努めていきたいものだ。

「明日に向けて・飛び出せ期待の星」

近年低空飛行をしていた自転車競技は今年の新潟国体で久しぶりに入賞者を出した。嬉しい限りである。

我が自転車競技連盟はアマチュア専用自転車競技場を備え、ロードは三瓶山周回コース、やがて完成するであろう尾原ダム湖周回コースなど環境は日本でも有数である。さらなる飛躍を図りたいものである。

国体の順位や大学入試センターテストの成績を見ると島根の力はこんなものだろうかと思う。上位の県とどこがどう違うのだろうか。もちろんこれは一つの断面にしか過ぎないと心得ているが何かのバロメーターであることも確かであろう。

今、わたしは出雲高校で時間講師をしている。ときどき先生方と話をすると、優秀な指導者は沢山いる。高体連、高野連、県体協などを通じて40数年、島根の体育界に関わらせていただいているが県下には優秀な指導者はキラ星のごとくいる。

島根の教育力・指導力はこんなものでは決してないと思う。

この島根から日本、世界に羽ばたく人材が数多

く育つことを願ってやまない。

今月のことば

「鍛える」ということ

わたしは健康づくりと称して、よく大山へ登っています。

7月のある日、沢山の教職員やボランティアに見守られながら大山へ登る特別支援学校の集団と出合いました。その最後尾には集団から少し遅れて、身体の不自由な少年が必死で頑張る姿がありました。少し高い段差は手足や全身を使って泥まみれになりながらの歩行でしたが、付き添いの先生やボランティアの人は声をかけるものの、殆ど手を出さず見守っていました。この光景を気にしながら私は頂上へ向かいました。

やがて他の少年達が登頂に成功し、友達や先生と歓声をあげる光景に、先に登っていた私達も大拍手を贈りました。

私は少し休憩して下山の途につきましたが、あの少年はどうしたのかと、ずっと気になっていました。途中の六合目で休憩してしまいたら、あの少年が登って来たではありませんか。疲労困憊した顔と、ドロまみれの衣服や手の擦り傷が苦闘を物語るように、あれから3時間以上の時間を要してここにたどり着いたのです。

たどり着くと3人の先生や付き添いの人に「おめでとう」と言われながら胸上げが始まりました。私も鳥肌の立つ感動を覚え、「おめでとう」と言って拍手を贈りました。

その後少年は、何度も「よく頑張った」「よく頑張った」と誉められながら、衣服のドロを払ってもらったり、すり傷を消毒してもらっていましたが、全身が喜びと自信に満ち溢れていました。

最近、教育の中から「鍛える」という言葉が無くなりつつあるような気がしていましたが、素晴らしい教育の一端を見せてもらいました。頑張った少年も立派ですが、心を鬼にして見守っていた先生や付き添いの人にも実に立派でした。

鍛える先に見える「自信」の獲得こそが教育のねらいであることを痛感する一日でした。少年は自己の限界点を伸ばし、大きな自信を得たことでしょう。

競技力向上統括アドバイザー
荊尾俊